

“ヒロシマ・ ナガサキ”

被爆神話を解体する

隠蔽されてきた日米共犯関係の原点

Shibata Yūko

柴田優呼



トルーマン声明 による原爆の定義 ①

《通常兵器と比較》

十六時間前、アメリカの航空機一機が一発の爆弾を投下して広島を破壊し、そこを役に立たない状態にした。この爆弾はTNT二万トン以上の威力があった。過去の戦争で使用された中では最大の爆弾であるイギリスの「グランド・スラム」の二千倍以上の爆発力を有していた。

トルーマン声明 による原爆の定義 ②

《宇宙や太陽と関連づけ》

これは原子爆弾なのである。宇宙の根本にある力を利用したものである。太陽から引き出されたこの力が、極東に戦争をもたらした者どもに対して、放たれたのである。

トルーマン声明 による原爆の定義 ③

《エネルギー源としての原子力に言及》

原子エネルギーを解き放つことができるという事実は、自然の力に対する人類の理解における新しい時代の到来を告げるものだ。将来それは、現在石炭、石油、水力から得ているエネルギーを補完するものになるかもしれない。

大田洋子『屍の街』冒頭 《書き出しの違い》

渾沌と悪夢にとじこめられているような日々が、明けては暮れる。

よく晴れて澄みとおった秋の真昼にさえ、深い黄昏の底にでも沈んでいるような、混迷のもの憂さから、のがれることはできない。同じ身のうえの人々が、毎日まわりで死ぬのだ。

西の家でも東の家でも、葬式の準備をしている。きのうは、三、四日まえ医者の家で見かけた人が、黒々とした血を吐きはじめたときき、今日は二、三日まえ道で出会ったきれいな娘が、髪もぬけ落ちてしまい、紫紺いろの斑点にまみれて、死を待っているときかされる。

死は私にもいつくるか知れない。私は一日に幾度でも髪をひっぱって見、抜毛の数をかぞえる。

ジョン・ハーシー『ヒロシマ』冒頭 《書き出しの違い》

一九四五年八月六日の朝、日本時間にして**かっきり八時十五分**、東洋製缶工場の人事課員佐々木とし子さんが、ちょうど、事務室の自席に腰をおろし、隣の机の女事務員に話しかけようとふりむいた**その瞬間**、原子爆弾が広島上空に一閃したのである。**この同じ瞬間**—藤井正和博士は、広島三角州を貫流する七つの川の、その一つに臨む自分の病院の縁側に悠々とあぐらをかいて、いまや『大阪朝日新聞』を読もうとしたところだった。仕立屋の後家さんの中村初代さんは、台所の窓際に立って、隣家の人空襲に備える防火線上に当たった自分の家を取りこわしているのを眺めていた。(略)

大田洋子『海底のような光』 《原爆観の違い》

見馴れない珍しくふしぎな夢を見たと思った刹那、緑青色の海の底みたいな光線が瞼の上を夢ともうつつともなく流れた。へんな夢を見るのねと思った瞬間、名状し難い強烈な音が起って、私はからだ粉々に砕け飛び散ったような衝撃を受けた。爆弾の地に落ちこむダダンという音でもなく、ザザッと雨のようだという焼夷弾の音ともちがい、カチンという金属的な、抵抗しがたい音響だった。

ジョン・ハーシー『ヒロシマ』

《原爆観の違い》

そのとき、ものすごい閃光が空を切った。谷本氏は、その閃光が東から西へ、すなわち市街から山へむかって走ったと明瞭に記憶している。まるで太陽を引き伸ばしたようであった。彼も松尾さんも、恐怖のあまりに反射運動的に動いた—